

『繁栄の花』

2019年08月06日

「東京新聞」の「本音のコラム」を書いている師岡カリマ氏のコラムは面白い。師岡氏は、父親がエジプト人、母親が日本人で、日本で生まれ、エジプトで育ったそうである。日本でアラビア語を教え、コラムニストとして活躍しておられる。モスリムに改宗した日本人は大勢いると聞いているが、師岡氏のようにアラブ世界に詳しく、モスリムの文化を伝えてくれる人は少なく、彼女の視点からのコラムを興味深く、愛読している。

7月27日に「ネタバレ御免」と題して寄稿し、「星新一著『繁栄の花』は、日本人のバイブルとしてみんなに読まれるべきだと思う」と書き出している。「バイブル」と言われて、読んでみたいという気になった。図書館で新書版の短編集を借りて読んだが、10頁ほどのショートショートSF作品であった。内容は下記のようなものである。

地球とメール星は電波のやりとりをし、交流していた。メール星人は高い文明を持っているが、武器や軍備を一切持たず、花を育て、ハチやチョウを愛して平和に暮らしていた。地球人は、軍隊がないから安心して付き合える、いざとなれば、こちらから攻めて占領することができるかと高を括り、使節団を送れと通信した。入れ違いに、優美な形をした通信ロケットが届き、動植物の輸出によって生活しているメール星から、「繁栄の花」という名の草花の種子が一粒送られてきた。植えてみると、盆栽の梅のように素晴らしい花が咲いた。「繁栄の花」は枯れることなく、年中咲き続け、季節によって色が変わり、朝と夕では違う香りを放った。ため息のするような美しい花に、地球人は酔いしれ、また、強欲が重なって、この花から種子を取って、増やした。すると、地球中に広がった。花は繁殖し続け、地球が「繁栄の花」で埋まりそうになったので、除草薬が必要になった。メール星と同じ除草薬のサンプルがあれば、同じものを作ればよい、彼らは平和な連中だから、と自分たちの身勝手さを棚に上げて、思った。その時、メール星から使節団が来た。地球人は、花には感嘆したが、増え過ぎて、地球を覆ってしまったので除草薬が欲しいと言うと、メール星人は、ハチを取り出し、このハチが花を食べて、枯らし、除草剤のかわりになると言う。確かに、ハチに食べられた花は枯れた。ハチには寿命があった。生殖能力のある女王バチはメール星から持ち出せないという。地球人は「女王バチをよこせ、さもないと腕づくでも…」と迫るが、メール星人は「軍備はありませんが、あなたがたが攻めてきたら、女王バチを全部殺してしまう」と答える。ハチが花の増殖をコントロールできる「秘密兵器」であった。地球人は歯ぎしりしながら、ハチを買い続ける貿易協定に調印せざるを得なかった。ハチが送り届けられるたびに、地球の貴重な資源や製品を積んで運んでいった。彼らがロケットで地球の品々を満載し立ち去るたびに「わたしたちが『繁栄の花』と名づけた意味がおわかりでしょう」と言われ、腸が煮えくり返ったが、仕方がない。

師岡氏は、「戦争をしない国には、どこよりも洗練された、老練でときに狡猾な外交手腕が必要だ」と書いている。メール星人は、「繁栄の花」を届け、これを処理するハチを買わせ、穏やかな生活を営んでいた。女王バチを武力で求めるなら、女王バチを全滅させ、地球を「繁栄の花」で埋めてしまうと脅したのである。他国に戦争を仕掛けられない外交を追求せずに、武器の抑止力に頼れば、防衛費が嵩み、福祉予算は切り捨てられていく。師岡氏は、「代償は福祉が悲鳴をあげているのに戦闘機に費やされる一兆円だったりする」と、「ネタバレ」を承知で、日本の政治の唐変木さを笑っている。安倍政権は力に頼って、米国兵器を爆買いする政策をしている。人間の尊厳を無視する事実を凝視し、「否」を表明すべきである。